

2. 体制と運営

座長 並木美喜雄

並木（座長）： 物理全体の規模が小さく、特に素粒子関係は各大学に余りはっきりした根がなかった時代に、大学の壁を越えて共同研究を盛り立ててきたのは、基研の大きな業績であった。その後各大学はかなり充実してきたが、それでもなお研究環境の悪い所、又、閉鎖的な所が未だにあり、基研を中心とした学問の発展は、学問自体の意味においても、研究者仲間という意味に於ても重要なことだ。そういう意味で、体制と運営の問題を振り返って議論してみるのは意義のあることと思われる。

最初、牧さんに今まで基研がどういうことをやってきたのか、その場合の状況、又これからの展望を含めて話をして載き、その後、岩崎さん、大槻さん、渡部さんにコメントをお願いする。最後に、山口さんから国際交流について、ショートコメントをしたいというお申し入れがあったので、お願いすることにする。

問題提起

基研 牧 二郎

基研は昨年創立 25 周年をむかえ、今や次の四半世紀の歴史を歩みはじめたわけであるから、この時点で基研の運営や体制にかかわる色々な問題を一度全面的に点検してみることが望ましいと思う。それは今後の研究所の発展の芽を伸ばすためにも有意義なことであろう。

基研をめぐる大学の体制や研究者グループの状況、さらには日本の物理学のおかれた国際的環境も、この二十年あまりの間に大きく変貌した。一体に、人間のつくるとんな組織体でも歴史的にその在り方や内容は変遷してゆくが、 10^3 年単位で安定な伝統宗教の体制（寺院や教会など）とちがいで、研究組織は学問の発展とともにあるのだから、たとえば 10 年を単位としてどんどん脱皮して行くと考えるのが自然であろう。ところで、さき程の小林（稔）先生のお話にもあったように、わが基研の今日の運営や体制の方式の原形は基研草創のころ数年の間につくられたものである。そのご数々の手直しを重ねて改善されてきたとはいえ、大枠はほとんど変わらずに今日まで来たのは、一方ではこの方式がそれなりの健全な基盤と合理性をもっていたからであると思われるとともに、同時に他方では、これが果して単なる惰性で固定化してしまったにすぎないものかどうかを厳格な眼で反省してみなければならぬだろう。さもないと、せっかく長年の経験を通じて定着してきた貴重なものが何時の間にか見失われてしまうにちがいない。

2.

通常、「基研の運営」と称せられる仕事は

- (i) 研究計画（研究会など）の立案と実施
- (ii) Visitor（外国人研究者、アトム型研究員ほか）の人選と受け入れ
- (iii) 固有部門所員の人事、所長の選考
- (iv) 共同利用研としてのその他の仕事（研究情報センター、KSI、・・・）

などを指している。これらは研究部員会議と運営委員会によって審議、決定されて実行または実現されるのであるが、無反省にルーチン化されたり固定化されたりしてはいないだろうか。

この中で、(i)（研究計画のきめ方など）については、研究部員会議としてもその在り方を検討することになっている筈であるので、この機会に若干論じておきたい。

研究会の位置や実施（の全部又は大部分）を所員の責任にゆだねてはどうかという意見があるかもしれない。それを当然のこととしている共同利用研究所もあるようである。しかし、私は、現在の基研のやり方のように、所員が所外の研究者と対等のベースで（共同利用の）研究計画に参加する方式がよいと考えている。しかしまた、基研が（基礎物理学の立場から）関心をもついくつかの大きな主題については、おのずから恒常的な（数年間の range の）研究計画（シンポジウム形式をふくむ）が——そのたび毎の“研究会提案”によらずに——基研を主体として実施されるのが適当であろうと思う。そうでないと、世話人の顔ぶれが悪く常連化したり派閥的になり、基研の機能の全国性がさまたげられるおそれがある。そしてこの種の研究計画と、提案者の個性のあふれた研究会（小規模の研究会や、モレキュール型研究計画 など）とが立体的・有機的に結びつくのがよいと考えている。これに関連して、研究計画の「長期」、「短期」の区分は無意味となればやめればよい。

(ii) の Visitor について

とくにアトム型で短期間来所する若い研究者について、所員との接触、交流がなさすぎるとか、具体的な仕事のテーマをもって滞在するべきであるという意見や批判がある。それなりにもっともであるが、同時に、何の obligation もなく、精神的に全く自由な環境にしばらく身を置いて物理を考えるという貴重な条件を保ってこれを生かす工夫も必要であろう。

(iii) についても現在の慣行でよいかどうか検討の対象とすべきだと思われるが、ここでは議論しない。

3.

基研の運営や体制が現在のような方式で良いかどうかを検討するためには、それなりの原則と方法がなければならない。

小林先生のお話によれば、基研の前身の湯川記念館について、これを「全国の研究者に解放された」ものにしようということが当時の皆の考えで、「共同利用研究所」というのはその後に出来た名称であったという。これは大切なことである。「全国の研究者に解放された」という意味は、「所外の研究者にも利用させる」ということではなく

「（全国の）研究者が自らの意見で自由にここに集まることができる」

ような体制を指すものと考えべきである。このことは、基礎物理学のような分野の研究体制が——かりに時代とともにどのように変わっても——保証し確保すべき研究者の基本的自由であると私は信じている。坂田先生がかつて基研を「学問の自由」の新たな発展を制度化したものと位置づけ、「単なる共同利用研究所に墮落する」ことを戒められたのもこの趣旨であったと思う。

これはいわば（私の信ずる）大原則であって、基研における固有部門の存在意義や果すべき役割もこの原則をふまえた上でより一層積極的に位置づけねばならないと考えている。このような考え方に立脚しながら、基研の運営や体制の方式を再構築し、貴重なものを継承しながら古い殻を脱ぎ捨てて行くように努力したいものである。

以上、問題点の一部に触れたにすぎないが、あとの討論のきっかけとして御参考になれば幸である。

（終）

並木： 牧さんのお話は、研究会提案について、所員は外の人と同レベルでやるということだった。それとは別に、初期に、木庭さん、早川さんは、所員研究費をうまくお使いになって、自分が重要と思うテーマについて、ワーキンググループをつくってやったというのを記憶している。そういうのは何時頃からなくなってしまったのか。木庭さん、早川さんはそういう意味でずい分努力されていたと思う。

牧： 今年度から、自由研究費を二つのカテゴリーに分けて、所員の研究に密接な project で人を1ヶ月なり2ヶ月なり呼びする「所員研究費B」を設けた。これは所員が研究部員会議のメンバーの一人として研究計画を出すことと矛盾しない。

コメント 1. 基研のこれからの在り方を考える

筑波大・物理 岩 崎 洋 一

基研は創立以来この30年間、全国の研究者にとって重要な役割を果たしてきた。これからもそうあってほしいが、この30年間の間に、囲わりの情勢も大きく変化したし、かつて重要な役割を果たしたものの中には、形骸化しているものもある。これ等の点を考えると基研は1つの曲がり角にたっているといっ